

鷹の目の狩人

XV

過去が記録される 骨董市場と印刷

しろはく古地図と城の博物館富原文庫

代表 富原 道晴

骨董市場を歩いていて、亜鉛凸版 700 枚余を購入した。昭和 52 年から 60 年、新聞印刷は凸版からオフセットに変わろうとしていた。手に入れた亜鉛凸版は某新聞社さんが使用されたものであった。40 年前の新聞製版の現場が蘇ってきた。文字は活字組版で写真、地図、図形等は亜鉛凸版であった。文字と組版し、紙型という厚めの紙に転写整形して、円筒形にし、鉛を鋳造、鉛版シリンダーとして、輪転機で印刷されていた。

骨董市場には過去のすべての出来事や記録がリアルに再現される。印刷業界にお世話になったおかげで、何かにつけ、懐かしく、印刷にかかわるものはコレクションアイテムとなった。風格のある江戸時代の木版の版木、当時の仏典、絵本等古典籍や広告、カラフルな錦絵、大きな古絵図、明治初期の新聞は新聞錦絵といわれる木版であった。やがて、銅版が導入され、細密な表現が可能になった。明治の簡単な色刷はコストの安い型紙を使ったカッパ刷が木版に代わり流行した。江戸小紋の型紙である伊勢型紙はあまりに見事なので今では装飾に利用されている。光にかざすと今で



見にくいですが明治の熊本城南面図
木版版木



今は懐かしい新聞輪転印刷用鉛版

いうところの切り絵の影絵を見ているようである。スイスに出張したときの休日、ローザンヌの古書店で大きなローザンヌ市街が描画された石版を見つけた。厚さ 6 ~ 7cm、大きさ 40×60cm の石、さすがに日本には持ち帰ることができなかった。今では美術品にしか使われない石版も、明治には大型の美人ポスターや地図の複製に採用され、木版や銅版に代わる印刷の主役であった。銅版の細密

さを石版で再現する銅版転写石版や海外から入ってきた小口木版、そして、銅版細密さは、平版、凸版、凹版という三大版式に分かれるにもかかわらず、一般の方にはまず見分けがつかない。凸版の特徴であるマージナルゾーンも硬い版とインキでは殆ど発生しない。それらはやがて平版印刷のオフセットに変わった。

木版印刷は伝統芸能とし

て、彫師や摺り師の技術伝承が進められている。高級美術印刷市場でコロタイプ印刷が使用されてきたが、オフセット印刷の高細線化によって危機に瀕している。コロタイプ印刷は不思議な印刷である。ガラスに感光性のあるゼラチンを塗布し、乾燥させたのち、連続階調の写真フィルムと密着させ、露光量によってゼラチンがシュリンクし、水を含む量が変わり、インキ転移量を変えることができる、つまり、グラビアと同様 XYZ の Z 方向のインキ量を変え、XY のみ、つまり線画原稿のように濃淡を表現するのに網点の大小が不要になる。一見ガラスという平版の上にゼラチンの皺という凹版の原理を混在させた印刷の常識の境界を超える印刷。今の時代、印刷用途では勿論、コストが合わないため、美術品の複製に使用されている。

絵葉書が盛んになった明治 40 年ごろの写真印刷はコロタイプ印刷に手彩色されていた。網点では再現に限界がある細部まで表現でき、非常に味わいのある美術品のような絵葉書に出会うとコロタイプ印刷に感謝である。ということで便利堂さんの主催される『コロタイプ技術の保存と印刷文化を考える会』に参加させていただいた。

技術の伝承と保存に傾注されている方々に敬意を表します。凄い、楽しい。凸版印刷さんの印刷博物館、東京のミズノプリンティングミュージアムさん、岐阜の大東化工さんの謄写技術資料館、栃木のトーホー加工さんの水性フレキソ資料館。印刷は凄い。印刷に夢を。遠き昔、インキ会社に就職した時の思いです。



木材用ブリキ拔型